

栗原 彬著  
**<やさしさ>の闘い**  
 社会と自己をめぐる思索の旅路で

小さなこ  
 とが気にな  
 る。  
 著者は本  
 書で「遊び  
 としての政  
 治」の魅力  
 ある例とし  
 て、一九三  
 ○年のガン  
 ディーによ  
 る八塩の行  
 進Vをあげ、それが想起させ  
 るものとして、さらにポスト  
 ン茶会事件(一七三七年)のこ  
 とを次のように述べている。

いだろうか。  
 ここから先は推測だが、お  
 そらく当時のポストン市民に  
 は、「インディアン」に対す  
 る、理解を欠いた利用主義の  
 ような態度があっただろう。  
 重要なのは、それを現在の観  
 点から道徳的に裁断すること  
 ではなく、そうした当時の歴  
 史的条件を、どのようにリア  
 リティをもつて私たちがつか  
 むことができるかだろう。同  
 様に、ガンディーも、そのお  
 りの彼自身の条件によって縛

▲インドにとって塩がそう  
 であったように、北アメリカ  
 の植民地の人びとにとって、  
 茶はイギリスの支配の象徴だ  
 ったのです。この年、ポスト  
 ンに茶を横んだ船が入港する  
 と、ポストンの人びとはイン  
 ディアンに仮装して茶船を襲  
 い、三四二箱約九万ドルの茶  
 を海に投げました。▼  
 米国史に通じていない私に  
 は、この「インディアンに仮  
 装して」というのが、どうい  
 うことかわからなかった。

なぜ、彼らポストン市民は  
 「インディアン」に化けたの  
 だろうか？ 東部の白人社会  
 は、当時、「インディアン」  
 社会との交流はほとんどな  
 っただろう。だとすれば、な  
 ぜ「インディアン」を装うこ  
 とが、茶船の襲撃を容易にし  
 たのか。港湾労働者に「イン  
 ディアン」が多かったのか？  
 そこらへんの事情が、私には  
 わからないので、近所の図  
 書館で事典類をいくつかあた  
 ってみた。だが、どの資料も、  
 やはり「インディアン」に仮装  
 して茶船を襲い「程度の記述  
 とどまらないうえ、なまじら  
 がそうしたかは、書かれてい  
 ない。これでは困る。歴史の核  
 心は、むしろ、なぜ彼らがそう  
 したのか、かかっているのでは

# より厳しく敏感な文体を

<やさしさ>の意味の実体を鍛えて

黒川 創

びとしての政治」の英雄的実  
 践家としてだけガンディーが  
 輝かしく語られるのであれ  
 ば、そこで描かれるガンディ  
 ー像は、かえって弱い。  
 著者もしばしば引用するエ  
 リク・エリクソンに、『ガン  
 ディーの真理』(一九六九年)  
 という著書がある。その本に  
 触れ、鶴見俊輔が「動揺する  
 ガンジー」(一九七〇年)と  
 いう文章を書いている。エリ  
 クソンは、状況のなかで動揺  
 するガンディーの姿をとらえ  
 たが、この困難のありようを  
 はっきりとは書かず、結論と  
 しては真・善・美の一致のよ  
 うなものをガンディーに見い  
 だして終わっているというの  
 が、鶴見の批判だ。

たどれば、ここで語られて  
 いるマルセル・デュシャンの  
 「極薄(アンフラマンズ)」  
 の世界。そこに迫っていくに  
 は、より厳しく敏感な文体を  
 必要とするのではないか。表  
 題の「やさしさ」の意味の  
 実体が鍛えられなければ、「闘  
 い」という言葉が取ってつけ  
 たように浮きあがって映る。  
 くらうかわ・そう氏II批評家  
 ・作家)



46判・256頁・2472円  
 新曜社

★くりはら・あきら氏は立  
 教大学教授・政治社会学専  
 攻。東大大学院博士課程単  
 位取得退学。著書に「やさ  
 しさのゆくえ―現代青年  
 論」「管理社会と民衆理性」  
 「人生のドラマトルギー」  
 など。一九三六(昭和11)  
 年生。